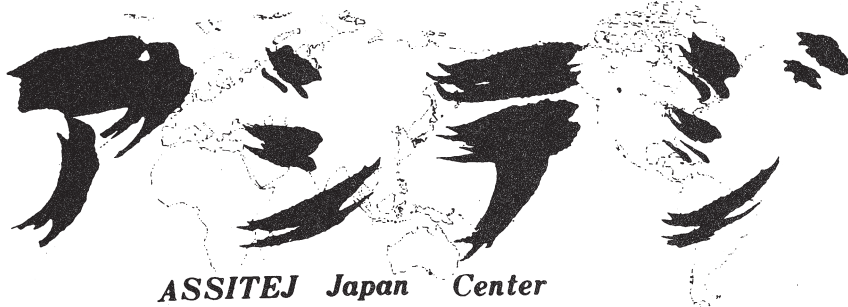




No. 108 (2010. 1)

国際児童青少年演劇協会
日本センター

<略称・アシテジ>

〒102-0085

東京都千代田区六番町13-4

浅松ビル 2A

T E L 03 (5212) 4773

F A X 03 (5212) 4772

Mail: centre@assitej-japan.jp

Web: http://www.assitej-japan.jp/

発行者 アシテジ日本センター

今年も

アシテジ日本センター

30周年事業を継続

●『30年史』の刊行

●『アジア国際会議』の開催等

「30周年事業」として、昨年8月、デンマークのマイケル・ラムローズ氏の講演会「世界・デンマークの児童青少年演劇に学ぶ」、そして同氏によるワークショップ「児童青少年のための脚本づくり」、アシテジ世界会長ウォルフガング・シュナイダー氏の講演会「世界・ヨーロッパ・ドイツの児童青少年演劇」を開催した。

今年も、「30周年事業」を継続する。

●『30年史』の刊行

アシテジ日本センターは1979年5月に設立。

昨年で30年を迎えたが、多数の事業を実施しながら、その業績を振り返ることもなかった。30年を機に、『30年史』を刊行することで30年に及ぶ歩みを検証してみたい。

文化庁に補助申請をしているが、補助がなくとも刊行する。

●『アジア会議』の開催

これから、理事会等で検討に入るが、今までアシテジ日本セ

ンターが開催した「国際会議」を列挙しておく。

・1985年8月「国際シンポジウム」(第1回全日本子どものための舞台芸術大祭典)・佐渡島 12カ国参加。

・1988年3月「第1回アジア児童青少年演劇会議」(「小豆島演劇祭88」) 7カ国参加

・1989年10月「89アジア児童青少年演劇国際会議」(東京・甲府) 12カ国参加

・1991年8月「日本海周辺諸国児童青少年演劇会議」(第2回佐渡大祭典) 4カ国

・1999年7月「アジア児童青少年演劇会議」①「沖縄・浦添会議」8カ国 ②「東京会議」11カ国

・2001年7月「世界児童青少年演劇会議」(オリンピックセンター) 15カ国

3月20日は
国際児童青少年演劇の日

3月20日(土)、11時開演、江戸東京博物館ホールで楽劇団いちよう座「お話がいっぱい」を観劇します



▲89年10月、甲府富士屋ホテル

アシテジ日本センターでは、このように数多くの「国際会議」を開催してきた。それぞれの苦労が思い出される。

今年の「アジア児童青少年演劇会議」は、現在、8月初旬大阪で、日本・中国・韓国を中心に、他のアジア諸国を加えての「会議」を予定している。

レジメ(事前配布資料)を充実させ、従来にないきつちりと、そしてDVD等を使つてのビデオアルな「会議」にしたいと考えているところである。

いずれにしろ「会議」の内容等が決まり次第、逐次お伝えしていきたい。(石坂)

2010 迎春

ことしよろしくおねがいたします

国際児童青少年演劇協会
(アシテジ) 日本センター

会計監査 鈴木 徹 相談役 多田 徹
土屋友紀子 土方 与平

理事 小林由利子
佐藤 嘉一
下山 久
白石 武士
鈴木 龍男
ふじたあさや
林 陽一
町永 義男
山崎 靖明

会長 文英
副会長 静仁
内島 幸則
大野 淑子
細沼 慎二
石坂 明
石川 良成
上保 節子
後藤 圭
後藤 武弥

事務局 局長 事務理

シュペービッツシュ・グミュント 国際影絵劇フェスティバル

後藤 圭

(劇団かし座代表)

私たち劇団かし座は、昨年10月にドイツで行われた「シュペービッツシュ・グミュント国際影絵劇フェスティバル」に参加してまいりました。劇団かし座は今まであまり海外公演に熱心ではありませんでした。

これまでの海外公演は04年の「UNESCO-APPAN Symposium and Festival Puppets」(タイ)と、「2005中国唐山国際皮影芸術展演」「ソウル国際児童青少年演劇フェスティバル2007」の3回だけです。

全編手影絵の新作で

今回の参加に私はいくつかの思いを託していました。「全編手影絵の新作を持って参加する」という事だけは最初から決めていました。

手影絵だけの1時間の作品が実行可能なのか、台詞の無い影絵劇があり得るのか、これまで積み上げて来た技術や表現力が海外、特にヨーロッパで受け止めてもらえるのか、など模索してみた事は沢山あります。そ

のために日本で公演している作品を持って行くのではなく、あくまで国際コミュニケーションを前提とした作品を試す必要がありました。

不安を抱えての出発

レギュラーのスケジュールをこなしながらストーリーを考え、そのストーリーに必要な新たな手影絵のキャラクターを試し、まとめていくのはかなり困難でした。メンバーで知恵を出し合いました。出発の間際までかかりましたがなんとか構成も音楽も間に合い、作品の用意が出来ました。

私としては面白く作ったつもりでしたが、ヨーロッパ人の観客など全く未知数ですし、反応も予想が付きません。私たち一行(キャスト4人、テク1人、マネージメント1人と私)は不安を抱えながら出発しました。経費の節減のためにモスクワ廻りのエアロフロートを使ったスクリーンがミュンヘンで出てこ



なかったり、いろいろありましたがなんとか準備が整い客入れを待つばかりになりました。

今回はフェスティバルのオープニング公演を皮切りに3ステージの公演、2回のワークショップを3日間でこなすスケジュールです。でもフェスティバルの開幕を任せてもらえるのはとても名誉な事です。なんとか受け入れて欲しいものだ、なんとか気に入ってくれると良いが...。開場して入って来るヨーロッパ人達を眺めながら私は祈る様な気持ちで開演を待ちました。

鳴り止まない拍手

主催者の挨拶があり、照明が落ち、音楽とともにステージがスタートしました。

約1時間の公演中、私は夢の様な時間の中にいました。シー

ン毎にはじける笑いと拍手、本当に本気で拍手をしてくれているのが良くわかりました。そして鳴り止まない拍手というのもめったに出来ない経験でした。彼らは私たちの公演を明らかに受け入れてくれたのです。かし座のメンバー達も本当にうまく演じる事が出来ました。素晴らしい出来と言っても差し支えなかったと思います。

オープニングから「March of Animals」ワークショップを挟んでメインのストーリー「Penta & Penta」そしてアンコールという構成でした。

影絵フェスだけに観客に詳しい人が多く、難度の高い手影絵のキャラクターなど、登場するだけで拍手をもらいました。私は気持ちが高ぶり、目が潤むのを止めることができませんでした。終演後、このフェスを長年育てて来たRainer Reusch &、現総合ディレクターのSybille Hitzelも大変喜んでくれました。

アンコールの合唱

後、2回の公演も大好評でした。特に最後の公演は子どもたちの団体鑑賞でしたが、実に良く見てくれました。最後は「アンコール!アンコール!」(ドイツ語で)の合唱!嬉しい限りでした。

今回の公演は大成成功と言えると思います。事前には心配もしましたが、ヨーロッパ人の大人にも子どもにも受け入れてもらうことができました。他のフェスティバルからもすぐに声がかかり、来年はもう一度ヨーロッパでの公演が実現しそうです。関矢幸雄先生から「かし座は影絵劇団なのだから手影絵をやりなさい。手影絵にはとても豊かな可能性があります。」と言われてから20年以上が経ちました。そこから始まった手影絵探求はまだまだ路半ばです。

「命を吹き込む」

でも今回そのプロセスの中で、確かな手応えを感じることができました。

このドイツで公演した手影絵だけのステージは3月に横浜でお披露目公演を予定しています。皆様、是非会場までお運び下さい。

もう一つお知らせがあります。この作品のタイトルが決まりました。

「Hand Shadows ANIMARE」です。ANIMAREはラテン語でアニマルやアニメーションの語源ですが、「命を吹き込む」という意味の様です。劇団かし座はこれからも影絵に素敵な「命を吹き込む」事を試し続けていきたいと考えています。

第一回上海国際人形劇祭典

金賞・脚本賞・演出賞を受賞

伊東史朗

(人形劇団ひとみ座)

13カ国24作品が上演

私たち、ひとみ座は、2000年11月4日から11月9日にかけて、中国上海市で行われた「第一回 国際人形劇フェスティバル」に参加しました。演目は『かわいそうな象 他』です。

上海は、2010年に開催される万博に象徴されるように、発展真つ盛りの大都市ですが、初めて開催された人形劇フェスティバルに対する力の入れようもかなりのものだと思います。

参加した国は13カ国。中国は9劇団が参加し、台湾と韓国がそれぞれ2劇団、ヨーロッパからは7カ国（オーストリア、オランダ、スペイン、チェコ、ドイツ、ブルガリヤ、ベルギー）、そして、インドとアメリカです。日本からは、ひとみ座と劇団銅鑼が参加し、全部で24の作品が上演されました。

盛大な開会式が

開会式は、11月4日午前10時、



し、野外の広い空間にはびつたりのパフォーマンスでした。

人形の展示も

フェスティバルに参加した劇団の演目のほとんどは、「上海人形劇場」で上演されました。「上海人形劇場」は、国立上海人形劇団のフランチャイズ劇場で、繁華街南京西路に面した高層ビルの7階にあります。ロビーには中国をはじめ、世界各国から寄せられた人形劇の人形が展示され、ガラス張りになっている工房では人形を製作している様子が見えるようになっていました。客席200ほどの劇場の壁にも人形（孫悟空や三国志の人形など）が飾られ、柱や天井には影絵人形がはめ込まれていて、楽しい雰囲気劇場のようすぐとなりに、稽古場のようなスペースがあり、そこは客席数100ほどの劇場になっていて、そこでも上演が行われました。「上海人形劇場」の他に、大掛かりなくつかの演目「アリババ（国立上海人形劇団）」などが「上海アーツシアター」という大劇場で上演されました。

工夫を凝らした作品群

国立上海人形劇団は、1957年に創立された劇団で、祭典の実質的な運営は、この劇団によって行われていました。かつ

て来日公演も行い、日本の劇団との交流も盛んに行っている劇団です。棒遣い人形による巧みな人形操作が特徴で、今演じている劇団員の多くは、上海戯劇大学人形劇科を卒業した人達です。近年は棒遣い人形に限らず、上記の「アリババ」のように、着ぐるみによる大型作品も創っています。

演目は、スケジュールの関係で4作品しかみられませんでしたが、「現代人形劇団（韓国）」による韓国の過去や現代の風俗と踊りを題材にした人形シヨウ、「福建省掌中木偶劇団（中国）」による民話劇、「アイラ女史（オランダ）」の一人芝居、「中国式影絵シアター（アメリカ）」による民話劇「虎の尻尾」です。それぞれが、工夫を凝らした作品で、楽しく見ました。福建省の劇団は、さすが布袋戯（一程



の片手遣い）の本場だけにテクニックを堪能しましたし、とくにアイラ女史の作品は、一人で10体以上の怪物人形と腹話術の手法で対話しながら展開されるミステリー劇で、巧みな演技に感心しました（彼女は演技賞を獲得しました）。

各種の賞を受賞

上演の他に2度のシンポジウムが開かれ、夫々の国の人形劇の状況や、これからの展望について話し合われました。財政難の問題、後継者の問題（若い人が人形劇に関心を持たなくなっている）など、どこも共通する問題を抱えているのだと思います。これからの展望については、「今のような状況だからこそ謙虚に伝統に学ぶことの必要性」が語られ、これは私も同感だと思いました。

私どもの作品『かわいそうな象 他』ですが、作品に対して「金賞」を、そして、個人賞として「脚本賞」と「演出賞」をいただきました。

最後のパーティーでは、豪華な中国料理を堪能しました。

そして、主催者の方々の「祭典は大成功だった。これからもぜひ続けて行きたい」という言葉が印象的でした。日本としても積極的な協力できればと思います。

オペレッタ劇団ともしび

ラオス・カンボジア・ベトナム公演③

大野 幸 則

「ラオス」 ビエンチャンの小さな空港を出るとすぐに市街地、

金色の仏教寺院が至る所に建っています。予定会場は日本の児童館の様な施設。図書室には日本から送られた沢山の絵本、ラオス語の訳文が一頁ごとに貼られています。私たちの公演の前に、子どもたちが日頃習っている民族舞踊や演奏が次々と披露されました。そのまっすぐな眼差し。「支援は物などでー」、と望まれたそうですが、日本側のボランティア団体が、民族的文化の振興を支援したいと続けてきたその結果でした。中庭に作られた屋根付き野外空間での公演。周りの建物のテラスから子ども達が食い入るように見入っています。澄んだ目がとても印象的でした。

お別れパーティー、そこにはなんと祈禱師が！。旅の安全を祈り送るラオス側が、送られる私たちの手首に、安全と多幸を祈りながら白い糸を一人一人に結びつけていきます。優しい気持ちで手の温もりとともに伝わる

ってきました。

【カンボジア】私にとって一〇数年ぶりとなるアンコールワット。観光の中心シムリアプの国際観光都市への変貌ぶりはいのすごいものでしたが、高層のビルでなく、民族風の建物であることが救いでした。

初日の学校は市中から車で三〇分ほどの村ですが、電気もなく、井戸は日本の市民団体が掘ったものでした。校舎もその方々がボランティアで建てたもので、協力した日本人の名前の刻まれた



▲ラオス

た額が校舎に掲げられていました。今回の公演はその皆様のご協力で実現したものです。

前日の下見には、思いもかけず、車で到着する私たちを門前に並んで拍手で迎えてくれました。子どもたちのさわやかな笑顔に胸詰まらせる劇団員。下見の時も場当たり稽古の時も子どもたちは客席となる校庭に座ってじつと見ています。授業はいのだらうかと心配していた私たちでしたが、その理由がすぐにはわかりました。私たちが立っている校庭に作られた舞台は、教室の机を持ち出し並べた上に板を渡し、その上にテントを張ったものでした。雲が出て風が吹き始めると雨がやってくるのがわかりました。公演中は空模様が気になり、雲が少ししかかると気をもんでいましたが、何とか公演は無事に終えることができました。雨期にあたり、野外公演が多い今回、最大の心配事でした。雨は煩わしいものではなく、むしろ歓迎されていることがわかりほっとしました。

お昼ご飯は、先生方が学校の炊事場で作った手作りの食事。やせた骨だけのような鶏の唐揚げもとてもおいしくいただきました。先生方の何人かは、中学を卒業して先生になったとても若く、初々しい方々でした。



▲ベトナム

周遊道路沿いの一寸小型の野外ステージらしい。バックパネルにインフォメーションとしてTOMOSHIBIの文字が書かれているのを発見。「えっ」「まさか！」と、皆舞台を取り囲み、通訳に確認すると「ここだ、ここだ」と言う。おそろおそろ舞台に立つと沢山のオートバイが私たちに向かって走ってくるではありませんか。銀座四丁目の交差点に舞台が作られているという感じです。

【ベトナム】最終公演地のハノイは街に活気が満ちあふれていました。オートバイの洪水を横切ることなどを教えてもらいながら予定会場へ。「ハノイ市開闢一〇〇年祭の前年祭子ども演劇フェスティバル」の一環として招聘を受けたものです。中国・韓国児童劇団、韓国（ジョイフル劇団）どちらも旧知の劇団。学校での公演を希望しましたが、市中的特設舞台でセッティングされたとのこと。ハノイ市中心地の池、上野の不忍池のよう。池畔の公園とそれを取り巻く周回道路は名物のオートバイであふれていました。メインの巨大な野外ステージが準備されている様子を確認しながら私たちのステージを探して回りましたが、どうやらさつき見かけた

日が落ちステージ明かりが入りいよいよ開演間近、これまでの生で歌っていましたが、今回は一人一人にマイクをつけスタンバイ。三角州につくられた客席にはいつの間にか家族連れが集まり、バイクの点灯した明るいライトの流れが舞台に向かつて目の前で左に左にと流れ折れていつまでも続きます。三人四人と家族を満載したオートバイも周りを囲みはじめ、池を望む周囲のレストランやカフェのテラスからも乗り出すように見物人が連なります。いよいよ開演。子どもたちは舞台にかじりつくようにしながら笑い声を上げています。

外国からのアシテジメンパーやAPPNのプロデュサーも笑いながら周囲を指さしながら私に声をかけてきます。「OH! NO クレイジー！」

日英、児童青少年演劇 ドラマ教育フォーラム

準備委員会報告

小林 由利子

(東京都市大学)

数年前に国際交流基金ロンドン

日本センター主催で「児童青少年演劇は必要か?」というテーマでフォーラムが開催された。国際交流基金の予想を上回るイギリスの児童青少年演劇人が集い、熱い議論を展開した。ロンドン日本センター文化担当の竹川氏と、第2回を開催できないかと話して開けるうちに月日が流れてしまった。

去年の夏、竹川氏と再会したとき、ロンドン日本センターの場所を提供するから、何か児童青少年演劇とドラマ教育にかかわるフォーラムみたいなものが将来的に開催できないものだろうか、という提案があった。

アシテジの交流を通して親しくなったヴィッキー・アイルランド氏にこのことを相談し、12月に2010年度のフォーラム開催のための準備委員会を開催することにいった。座長をアイルランド氏にお願いし、日英児童青少年演劇／ドラマ教育フォーラム準備委員会(仮称)は走

り出した。

昨年9月に児童青少年演劇人と、ドラマ教育の実践的研究者がパネリストになり、学校で仕事をしている演劇人と教師を対象にした、児童青少年演劇鑑賞と演劇ワークショップをテーマにしたシンポジウムが開催され、大盛況だった。

パネリストは、ドラマ教育の大御所であるセシリー・オニール博士とジョナサン・ニールズ博士で、開催場所がサウスバンクにあるユニコーン劇場であったこともこのフォーラムの大きな成功の要因であったと考える。

アイルランド氏とわたしは、このような企画を日英間でできないだろうか、と考えた。そこで、イギリスの主要な児童青少年演劇人とドラマ教育研究者に呼びかけ、2009年12月7日(月)10時から13時まで、国際交流基金ロンドン日本センターで2010年度のフォーラムに向けた準備委員会が開催されることになった。

幸いにもオニール博士とチェスター大学のアラン・オーウェンズ博士が参加して下さることになった。オーウェンズ博士から、「なかなかプロの演劇人との出会い、話し合う機会がないので、今回の試みは両者にプラットホームを提供する、とてもいい機会だ。イギリス人同士だとなかなかできなくてね」というポジティブなコメントをいただいた。今回は不参加だったが、9月のフォーラムにはニールズ博士も参加予定である。

参加者の積極的な発言から、イギリスの児童青少年演劇の方々が、熱心に日本との交流の機会を臨んでいることや日本の児童青少年演劇に対する好奇心に驚かされた。特に、日本の優れた脚本の英訳が必要である、と繰り返し述べられていた。特別支援の必要な児童青少年と演劇を通してかわつていく劇団の取り組みは日本に紹介する必要があると思った。この劇団の演出家は、他の国との国際交流は盛んに行っているが、日本とはどのようにしたいかわからない、とコメントしていた。日英の共同制作は、特定の劇団同士ですでに盛んに行われている。しかし、多面的に共同制作の潜在的な可能性をもっと掘り起こす必要があるのではないかと改めて考えた。

追悼・岡田 陽 先生



昨年、11月26日、岡田陽先生が亡くなられた。享年86歳。先生の功績は広く深いので、ここでは私が知る範囲で、国際交流を中心に、先生の功績の一端に触れてみたい。

先生の最初の海外への渡航は、1964年(昭和39年)にロンドンで開催された世界初の「国際児童演劇会議」に日本代表団(落合聰三郎団長)として、ご夫妻で参加されたのが初めてであろうと思う。

何よりも凄いのは、その際約7カ月にわたり、欧米諸国を教育視察をされていることである。当時1ドル360円、外貨持ち出しも500ドルと制限されていた時代である。

先生は、『少年演劇』の創刊号(67年)に、その視察の報告を載せられている。

欧米の演劇教育の基盤から学校演劇の傾向、そしてこの

時に、イギリスのムーブメントやアメリカのクリエイティブドラマティックスの紹介をされている。

先生が日本の児童青少年演劇へもたらされた功績は大きい。特に演劇教育、とりわけ海外の演劇教育の紹介・実践・指導は数多くの人たちが多くの教唆を得てきた。

①クリエイティブ・ドラマティックス
②児童観客参加劇
③朗読劇(リーダー・シアター)

である。特に「朗読劇」は日本にすっかり定着した感がある。

1989年にグループD・I・L.を創立、20年にわたる公演を続けてこられた。楽劇団いちょう座の作品も定評を得てきた。

ドラマ教育の世界的なリーダーであるブライアン・ウェイ氏やムーブメントの権威アン・バーリン女史などを日本に招聘し、講習会を開いたのも先生である。

このように、先生の仕事は日本の青少年演劇の国際交流の嚆矢ともいえる。(石坂)

日本の子どもたちに クリスマスプレゼント！

「ドナウ児童青少年演劇
日本公演2009」を終えて

山崎 靖明

日本・ドナウ交流年に

日本・オーストリア友好140周年、日本・ハンガリー友好140周年国交回復50周年、日本・ブルガリア国交回復50周年、日本・ルーマニア国交回復50周年を記念し、2009年1月

から12月までの1年間、日本とドナウ川（信濃川の8倍の長さ）流域4ヶ国（オーストリア・ハンガリー・ブルガリア・ルーマニア）との友好促進を目的に、政府間で合意し、日本・ドナウフレンドシップイヤー2009（日本・ドナウ交流年2009）と題し、様々な文化・芸術交流が行われました。

4カ国8劇団を招聘

中でも最も大規模で、その交流年のトリを飾る事業が、ドナウ児童青少年演劇日本公演2009でした。

日本の子どもたちにドナウからのクリスマスプレゼントを贈るべく、12月5日イン神奈川をスタートに、イン長野、イン静



▲公演終了後、子どもたちと交流

岡、イン新潟、そして12月20日のイン東京まで、1都4県を3週間をかけ、ドナウ4ヶ国の8劇団（各国2劇団）を招聘しました。

「ドナウ児童青少年演劇日本公演2009実行委員会」が、各地方の実行委員会との共同主催で、「日本・ドナウ交流年2009記念事業」・「文化庁国際芸術交流支援事業」として縦断フェスティバルを実施致しました。

※実行委員長に（株）日本児童演劇協会・アシテジ日本センター内木会長にお願いし、委員は小川信夫さんを始め、APPN・JAPANメンバーの石川君子、大野幸則、上保節子、小杉隆、砂岡誠、高柴秀樹、田辺慶一、土屋友紀子、町永義男、山崎靖明、結城民子で組織しました。

約40作品から選ぶ

来日した劇団と作品は、オーストリアから、2005年のEU児童青少年日本縦断公演で来日したことのあるシアター・アイエム・オーレンセツセルによる「鉄のハンス」とカリン・シヤーフアー・フィギュレン・シアターによる「夢のあと」。

ハンガリーからコリビリ・シアターによる「トダ」と、ツイロカ・パペット・シアターによる「青い服を着た女の子」。

ルーマニアからシウフリシ・パペット・シアター・プロイエステイによる「ピノキオ」と、イオンクレアンガシアターによる「カラフル・バルーン」。

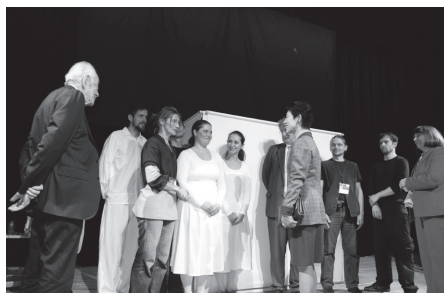
ブルガリアからシアター・ノバディーズによる「コールド」と、シアター・オン・ホイールズ「2匹のねずみのお話」。

アクセシビリティもあり

日本中、世界中が新型インフルエンザに翻弄された2009年でしたが、フェスティバルの中止も覚悟して、張り紙、消毒液、マスク、そしてチケットの払い戻しも考えた上の決行でした。

アクセシビリティとしては、ハンガリーのグループのカーゴ（航空貨物）便が公演団の来日3日前に到着予定でしたが、フィンランド航空のストライキによって便がキャンセルされ荷物が予定より大幅に遅れて仕込み予定日の夜に届きました。よって、スタッフたちがスタート早々慌てさせられました。

また、新潟の突然の雪に予定のタイムテーブルが余儀なく大幅に変更されてしまったこと。



▲公演終了後、高宮宮妃殿下との交流

そして、来日の時点ではすべてのメンバーにオリエンテーションで注意を促したにも係わらず、長野公演の会場の楽屋に泥棒に入られ、ブルガリアの代表者と通訳のIDカードや現金が盗まれたことぐらいで、公演はどここの都市も好評でした。

道を開く挑戦を

APPN・JAPANのメンバーは、設立以来11年間、数々のフェスティバルや招聘事業を経験してきており、各プロデューサーの対応能力には安心を感じます。

今後もっと多くのプロデューサーの方々と一緒に取り組んで頂けたらよいと考えています。現在、日本の児童青少年演劇の現状は、年々厳しさが増し、1年先が見えない状況ともいえます。2010年は決断の時かもしれません。腰を上げなければ、チャンスはなぐしかねます。

過去の日本の児童青少年舞台芸術の歴史と実績をこのまま時代の変化の中で、忘れさせてはいけないと思います。

現代の子どもたち、そして未来の子どもたちのために、関係団体とも協力しながら、その力を結集させ、道を開く挑戦をしようではありませんか。

（ドナウ児童青少年演劇日本公演2009・事務局長）

「ドナウ児童青少年演劇日本公演2009 in 東京」

子どものための舞台創造 その情熱が四つの国を結びつけたのか

内 木 文 英

ドナウ川の流域、ヨーロッパ中部の、オーストリア、ハンガリー、ブルガリア、ルーマニア、その四つの国の、児童青少年を対象として舞台創造を行っていく八劇団が、昨年十二月、来日して、日本にはないような、不思議な雰囲気を持った舞台を観せてくれた。

ヨーロッパの国々の持つ歴史的な理念、それがドナウ川という自然の力で結びついたのであるうか。子どものための舞台芸術の創造という同じ理念のもとに、現在も将来も行動していくのであろうか。四つの国が結びついて行動している。そこに驚きを感じてしまう。

四つの国の八つの劇団の東京での上演は、十二月十九日(土)、二十日(日)の二日間、アトリエ フォンテーヌ、ゆうゆう今川館ホール、東京芸術劇場小ホール、シアター代官山で、八本の作品が上演された。

「コールド」(ブルガリア)、「トダ」(ミラクル)、「ハンガリー」



▶「青い服着た女の子」(ツイロカ・パベットシアター) ハンガリー

「鉄のハンス」(オーストリア)、「カラフル・バルーン」(ルーマニア)、「青い服着た女の子」(ハンガリー)、「夢のあと」(オーストリア)、「ピノキオ」(ルーマニア)、「2匹のねずみのお話」(ブルガリア) がその八本である。

私はそのすべてを観たいと願ったが、五本が限度であった。初日は東京芸術劇場で高円宮妃殿下とハンガリーのツイロカ・パベット・シアターの舞台を観た。ドラマとは言えないような、物語性、演劇性にとはいえないものだったが、しかし創造性に満ちた舞台だった。妃殿下も声を出して、人形の動き、舞台の変化に驚いておられた。観客である子どもたちもびっくりするような舞台だった。

その夕刻、代官山に移動してルーマニアの「ピノキオ」を観た。ピノキオは、人形と人間とを重ね合わせた人物だ。大劇場での上演を考えての演出だろうが、俳優の声が大きすぎて、その芝居の世界に入っていけないところがあった。

翌日にはアトリエフォンテーヌで「トダ(ミラクル)」を観た。幼児を対象とした舞台のようで、赤・青・黄の箱をつないで列車にしたり、犬、猫などを表現して観客をおどろかせたりし

◀「夢のあと」(カリン・シャーフ・フィギュレン・シアター) オーストリア



ていた。観客の子どもたちを舞台によびこんで、楽しく遊ばせていた。かけ足で池袋の芸術劇場に移動して、オーストリアの「夢のあと」を観る。ドラマに欠け、まとまった話はないのだが、人形の表現に惹きつけられた。

そしてまた代官山に移動する。一日に三回、場所を変えて三本の芝居を観る。普通でない行動をとっているのだと感じてしまう。だが、それぞれの舞台に、異様としか言えない情熱があった。子どものための舞台だが、それを外国で演じようとする劇団の人たちの、なみなみならぬ熱意を感じるのだ。

「2匹のねずみのお話」も、演者の情熱を感じさせる舞台だ

◀「2匹のねずみのお話」(シアター・オン・ホールズ) ブルガリア



った。ねずみ(人形)を扱う女性、単なる人形つかいでなく、子どものための、特別な夢の世界を創る者のように感じた。五つの舞台を観て、これはどういうことであろうか、と考えてしまった。

「ピノキオ」をのぞいて、それは演劇と言えるものではない、ということだ。観客である子どもたちのための舞台を創っているということではないか。児童演劇の伝統を一番長く持ち続けてきたのはヨーロッパだ。だから日本もヨーロッパに学ばなければならぬ。演劇というものが、人と人をむすびつけるだけではなく、国と国を結びつける力を持っているということだ。

アシテジ日本センターの歴史を振り返る⑨

「おおらかでいい時代であった」

石坂慎二

(アシテジ日本センター)事務局長

『アシテジ』が不定期な理由

アシテジ日本センターの機関紙『アシテジ』が、4月、7月、10月、1月と、年4回、きっちり発行されるのは、香川良成さんを編集長として、土方与平・富田博之・石川明さん、そして事務局の倉原房子さんの編集委員会が発足する、1986年10月号からである。

それまでは、ひどかった、としか言いようがない。

設立が1979年5月。86年10月までの約7年の間、14号しか発行されていない。1年で2回である。ひどいときは、11か月も間が空いている。しかも5・6号が合併号だから、13回の発行となる。

何故か。原因は以下のように考えられる。

- ①児童青少年演劇界では、風の子などほんの一部の劇団を除いて、国際交流が少なかつた。
- ②アシテジ日本センターそのものの事業が少なかつた。

③1985年8月の「佐渡大祭典」の準備等に追われていた。とにかく、忙しく、『アシテジ』どころではなかつた。

④当時、児童青少年演劇が子ども劇場を始めとして、全盛時代。劇団も経済力があり、高い会費にも関わらず、文句を言う人もいなかつた。

等々が考えられる。何度も言うが、当時はおおらかで、ある意味では(怒られるが)いい加減でもあつた。

それを見かねた香川さん、土方さんあたりが積極的に乗り出してくれたのである。

特に土方さんは、誠実、几帳面。理事に選出されたこともあり、どうにかしなくては、と思われたに違いない。

この時期から、アシテジ日本センターの体質が大きく転換していく。つまり、体質転換の第一歩が『アシテジ』の定期発行

といえる。

「臨時総会」開催の理由

もう一つ、設立初期の頃のおおらかな話しておく。

アシテジ日本センターの「総会」のことである。

設立の1年後の1980年5月29日、「臨時総会」を開催し、設立後の1年間の会計報告・事業報告等を行っている。

不思議なのは、設立当初の「規約」では、「定期総会は年一回」を謳っておきながら、「臨時総会」を隔年開催していることである。

ちなみに、昨年度(2009年度)の総会は本来なら第31回のはず。ところが「第28回定期総会」と銘うたれている。3回分が違っている。

しかしその3回分(3年間)、「臨時総会」と称してちゃんと開催されているのだ。つまり毎年開催されているのである。

どうしてこうなつたか。以下私の推測である。

設立当初、「定期総会は年一回」としたものの、「とりあえずは、アシテジ日本センターの事業も少なく、毎年開く必要もないので2年に1回にしようや。何かあつたら『臨時総会』を開こう」と「2年に1回」開くことにした、らしい。

ところが、設立記念パーティー



▲方掬芬さんの「中国児童演劇の現状を聞く会」

を開いていない(本来なら設立総会の日に開くべきものを、協会の総会と日を合わせたため、協会の懇親会と一緒にすることができなかつた)。設立記念パーティーの開催日を探るものの、なかなか機会がない。

そのうち、「設立1周年に開こう。ついでに臨時総会を」となつた。つまり、パーティーが先で臨時総会は後の発想である。

総会が年一回になつた理由

したがって、設立1年後の80年は「臨時総会」、翌年が「定期総会」と、総会は毎年交互に開催された。

1984年の3回目の「臨時総会」では、「臨時総会」というものの、毎年、総会が開催さ

れているではないか。こんななら、毎年、「定期総会」を開いたら」となつたと思われる。

「臨時」と「定期」を交互に開いているうちに、「規約」に「定期総会は年一回」とあるのをすっかり失念してしまつて、「2年に1回」思つてしまつていた。

おかしいのは、『アシテジ』の1985年5月号に、これは「臨時総会」の報告号であるが、最後に「理事会提案で、定期総会を年一回にするという案が出され、全員一致で決まりました。総会は年に一回というふうに規約が改正されました」とあることである。

繰り返すが、本当におおらかでいい時代であつた。

先を急ぐ。

話は、設立当初に戻る。

1980年2月29日、折から来日中の中国児童芸術劇院の女優、方掬芬さんを招き、「中国児童演劇の現状を聞く会」を開いている。

方さんは、中国を代表する名子役として長年にわたり活躍。

当時、中国は「四人組」時代を終え、ようやく復興の兆しがみえていた。その興味もあつてか、35人も参加している。

【編集委員】石坂慎二、上保節子、菊田朋義、林陽一、ふじたあさや